

『蜻蛉日記』養女求婚記事における道綱母

——仲介者という機能に着目して——

一、はじめに

『蜻蛉日記』の下巻は従来、上中巻に比べて身边雑記的、物語的とされ、また上巻から続く主題の分裂、拡散が見られるなどの評価が為されてきた。しかし近年では、このような捉え方に留まらず、上巻から続く主題との関連などによって、下巻の諸記事を再評価する論も多く見られる。下巻の主要記事の一つである天延二年の養女求婚記事も、その流れの中でこれまで再評価が試みられてきた。近年では求婚作法という儀礼的側面からの指摘や、求婚記事を中心とする歌の流出の問題から下巻の再構成と享受の問題への言及なども見られ、複雑な様相を孕み込んだ養女求婚記事は様々な視点からの検討の余地をまだ残していると言える。

従来、養女求婚記事に関する研究の最も大きな方向性は、道綱母と速度との関係をあたかも男女の交渉であるかのような妖艶なものとして捉え、それを兼家の代償として見るることによって、上巻から続く主題が下巻の養女求婚記事にも見られるとする主張で

ある。^③美しい風流貴公子ながらに描出された速度像や物語的展開、細部の表現を見る限りにおいては、それを認めることができるだろう。この視点は、主に道綱母と速度の二者の関係性を中心として当該記事を読み解いたものである。

一方で、道綱母と兼家との交渉自体を重視し、両者の関係が他者を介在させた間接的で新しい関係性であると指摘する論も見られる。「間接的」とは、養女や速度という第三者を介在させることによってしか最早成立し得ない関係の在り方を指す。確かに、道綱母と兼家との間に速度が介在するという三者の在り方に注目すれば、両者の関係を間接的であると捉えることは首肯できる。しかし、実際の記事に目を向けると、道綱母はしばしば速度と兼家との間を取り持ち、兼家に実際に文を出して意向を尋ねる場面などが描かれている。^④つまり道綱母は、求婚という一件を通して兼家と速度との間を繋ぐいわば「仲介者」^⑤として機能しているのであ

滝沢 美子

る。仲介者として機能することで、道綱母は文を介してではあるが兼家と実際の交渉を持つこととなる。このことは、間接的というよりはむしろ、兼家との間にある種「直接的」な交渉を持っていると判断できるだろう。このように、仲介者として機能する道綱母を重視して考えた場合、必ずしも遠度を介しての間接的な関係というだけでは終始し得ない部分があるのではないかと考える。

従来の研究の中では、主に道綱母と遠度の二者の関係を重視する視点と、道綱母と兼家との間に遠度を介在させるという視点によって養女求婚記事は捉えられてきた。これらは兼家との関係性の在り方の内実を示すこととさまざま悲哀へと結びつくものである。しかし、兼家と遠度との間に入り交渉を持つ仲介者としての道綱母を焦点化した場合、記事の進行に従ってその様相に変化が見られることから、必ずしも悲哀に直結する見方とはなり得ない。交渉の内実は場面を追う中で確認してゆくこととするが、仲介者という視点を通して直接的な交渉の在り方を見ていくことは、これまでとは異なる構図で養女求婚記事を捉え直すことが可能となるのではないかと考えている。

仲介者という役割は、求婚記事であるからこそ有効に機能し得る立場なのであり情報の錯綜する状況の中にあってはそれらを上手くまとめながら、一方でその機能を通して兼家と遠度との直接的な交渉を持つこととなり、最終的には道綱母の兼家に対する思いをより明確に見ていくことに繋がるはずである。よって、兼家との関係性を捉えていく上では、仲介者という視点はより有効に働いていくであろう。

本稿ではこのような観点に基づき、これまで中心に据えられることの少なかった道綱母自身の仲介者としての機能に着目することで、養女求婚記事を整理し直していくことを試みる。

二、道綱母の姿勢の変化

天延二年一月、道綱の右馬助昇進を契機として、兼家の異母弟・右馬頭の藤原遠度との関係が深まってゆく中で養女求婚の話は語り出される。道綱母は、求婚記事の冒頭から仲介者として機能していたわけではない。前述したように、兼家と遠度とを繋ぐことが仲介者としての役割であり、求婚の段階が進む中で次第に仲介者として機能するようになるからである。では、道綱母は仲介者として機能する以前において、いかにして求婚の話と接していたのだろうか。以下では、その過程を確認していく。

求婚記事で仲介者として機能する以前においては、道綱母は道綱による報告によって、遠度の求婚への意志と兼家の意向を知り。本文中にはそのような場面が二箇所あるので、それらを順に挙げながら道綱母がこの求婚の話にどのように接していたかを確認する。以下に引用するのは、道綱母が求婚の話を道綱から伝える聞く最初の場面である。

からうして帰りて、またの日、出居のところより夜更けて帰り来て、臥したるところによりて言ふやう、「①殿なむ『きんぢが寮の頭の、去年よりいとせちにのたうぶことのあるを、そこにあらむ子はいかがなりたる。大きなりや。ここちつき

にたりや』などのたまひつるを、②また、かの頭も、『殿は仰せられつることやありつる』となむのたまひつれば、『さりつ』となむ申しつれば、『明後日ばかりよき日なるを、御文奉らむ』となむのたまひつる」と語る。③いとあやしきことかな、まだ思ひかくべきにもあらぬをと思ひつつ、寝ぬ。

(三三四～三三五頁)

傍線部①は兼家が養女の成長の様子を道綱に尋ねた場面、②は遠度が兼家の意向を窺いながら求婚の文を出す日取りを検討している場面である。これらの情報を最初に道綱母に伝えた人物は息子の道綱であった。道綱は、息子として道綱母の意に従う人物であり、また一方で兼家とは父子として、遠度とは上司・部下としての接点を持つことで、道綱母にとっては有力な情報源となっている。この情報を聞いた道綱母の態度は傍線部③に表れている。「いとあやしきことかな」と突然の求婚の話に戸惑い不信の念を示しながらも、「まだ思ひかくべきにもあらぬをと思ひつつ、寝ぬ」と養女の幼さを理由に求婚の話に積極的に乗ろうとはしていないことが示される。この場面における道綱母は、道綱によって求婚の情報をもたらされるばかりで、自身から積極的に情報を求めたり、話を進めようとしたりする態度はほとんど見られない。よって、極めて受動的に求婚の話に接していたと言ったことが出来るだろう。しかし、この態度は仲介者として機能する以前に一貫して見られるものではない。次に引用するのは、遠度が実際に文を送ってきた後の展開を示す場面である。道綱を通して兼家や遠度の意向を確認するという点では先の例と共通するものの、それまでの受

動的とも取れる態度とはやや異なつて、情報を取捨選択しながら求婚の話へと関心を示す道綱母の姿が示されるのである。

さて、その日になりて文あり。いと返りごと、うちとけしにくげなるさましたり。うちのことばは、「月ごろは、思ひたまふることありて、殿に伝へ申させはべりしかば、『ことさまばかり聞こしめしつ。いまはやがて聞こえさせよとなむ仰せたまふ』とうけたまはりにしかど、いとおほけなき心のはべりけると、思し咎めさせたまはむを、つつみはべりつるになむ。ついでなくてとさへ思ひたまへしに、司召見たまへしになむ。この助の君の、かうおはしませば、まありはべらむこと、人見咎むまじう思ひたまふるに」など、いとあるべかしう書きて、(中略)④返りごと聞こゆべきを、まづ、これはいかなることぞと、ものしてこそは、とてあるに、『物忌やなにやとをり悪し』とて、え御覽せさせず」とて、もて帰るほどに、五六日になりぬ。

(中略)

いま、二三日ばかりありて、「からうして見せたてまつりつ。のたまひつるやうは、『なにかは。いま思ひさだめてとなむ言ひてしかば、返りごとは、はやうおしはかりてものせよ。まだきに來むとあることなむ、便なかる。そこにむすめありといふことは、なべて知る人もあらじ。人、異様にもこそ聞け』となむのたまふ」と聞くに、⑤あな腹立たし、その言はむ人を知るはなぞと思ひけむかし。

(三三五～三七頁)

この場面では、はじめに遠度から届いた文が、ひどく返事をしにくい内容だったため、道綱母は傍線部④にあるように、道綱を使って遠度に返事をする前に兼家の意向を確かめようとしている。結果としては兼家が物忌み中のため取り次いではもらえなかったが、先の傍線部③に見られたような、受動的な態度はここには見られない。遠度の文の内容を見て、情報を精査するべく兼家に確認を取る道綱母は、能動的とも言える態度で求婚の話に接していると言える。また、取り次いでもらえなかった文を、後日道綱を介して届けさせ、返事の報告を受ける。それに対する道綱母の反応が示されたのが傍線部⑤の部分である。道綱母の感情表現「あな腹立たし」を傍線部③で見られた「いとあやしきことかな」という反応と比較すると、より激情的で、相手を咎めるような心情となっている。心情の内実に立ち入ることはここではしないが、その表現の差異からは、道綱母のより敏感な反応を読み取ることができる。この場面での道綱母が、求婚の話により積極的で能動的な態度で臨んでいると言えるだろう。

以上確認してきたように、求婚記事の導入部から遠度の求婚の文が送られてくる場面までにおいて、道綱母は道綱を介して求婚に関する情報に接していることが確認された。しかし、道綱母はその中で一貫した態度で求婚の話に接しているわけではない。はじめは受動的とも言える態度であったのに対し、文が送られてきたことを契機として後には自ら情報を取捨選択し、対応を判断しようとするなど、能動的とも言える態度で求婚の話に接していたことが確認された。以降で注目する道綱母の仲介者という機能は、

能動的に求婚の一件へと介入していく立場である。よって、求婚記事のはじまりにおいては、道綱母の仲介者としての意識の萌芽が段階を経て描かれていることが明らかとなった。次節以降ではこのことを踏まえ、道綱母の仲介者としての機能に着目していく。

三、道綱母の仲介者としての機能

養女求婚記事は、遠度からの文、更にその来訪など、求婚作法にしたがって徐々に進行してゆく。その中で、道綱母は前節において見られたように道綱を介して求婚の話に接するのではなく、文などの媒体を用いながらも自らが求婚の話に介入していくようになる。それも単なる養女の保護者としてではなく、結婚の許可を出す兼家と、結婚を切望する遠度との間を取り持つ仲介者として、自らが能動的な姿勢で話に介入していくのである。以下では、道綱母が仲介者としていかに機能しているかを具体的に場面に即して確認していく。

まず、道綱母が仲介者として機能しはじめる最初の例を見てゆく。以下に引用するのは、遠度の求婚に対する兼家の意向を確認したのち、遠度の文に返事をするという場面である。

さて、振り返ると、今日ぞものする。「このおぼえぬ御消息は、この除目の徳にやと思ひたまへしかば、すなはちも聞こえさすべかりしを、⑥『殿に』」などのたまはせたることの、いとあやしうおぼつかなきを、尋ねはべりつるほどの、唐土ばかりになりなければなむ。されど、など心得なべらぬは、いと

聞こえさせむかたなく」とてものしつ。

(三二七頁)

道綱母が送った文の内容は示されているが、それに対する遠度の反応は示されず、「さて後、おなじやうなることもあり」(三二八頁)と、文の往来が幾度か繰り返されたことが語られるに留まっている。注意したいのは、道綱母は傍線部⑥に見られるように、遠度の文の中で明かされた兼家の意向に不信の念を示し、道綱母自身が兼家に直接意向を伺っていたことを宣言しているという点である。兼家と遠度は兄弟であることから、道綱母の埒外の場合で求婚に関する交渉をしていたことは十分に想定される。しかし道綱母はそれを容認せず、情報を精査して事実を見極めようとする。その姿勢は道綱母自身の積極的な求婚話への介入として見ることもできる。このように、仲介者として事実を精査しようとする姿勢は次に引用する場面においても見られる。天延二年三月の遠度とのやり取りの中で、兼家の意向が再度示されるが、それに対する道綱母の反応に注意したい。

三月になりぬ。かしこにも、女房につけて申しつがせければ、その人の返りごとと見せにあり。「おほめかせたまふめればなむ。これ、かくなむ殿の仰せはべめる」とあり。見れば『この月、日悪しかりけり。月たちて』となむ、暦御覧じて、ただいまものたまはする」などぞ書いたる。⑦いとあやしう、いちはやき曆にもあるかな、なでふことなり、よにあらじ、この文書く人のそらごとならむと思ふ。

(三二八頁)

天延二年の一連の養女求婚記事の中で、三月の記事は右に引用した部分のみである。この記事が挿入されたのは、道綱母の介入し得ない場における兼家・遠度間の交渉の内容に対して抱く不信の念を強調するためであろう。兼家方の女房の取り次いだ内容を「そらごと」ではないかと疑っている。つまり遠度を介して伝わってくる兼家の情報に対しては懐疑的であることが示されるのだ。それは、道綱母自身の自らの仲介者という立場に対するこだわりと無関係ではなく、むしろ正確な情報の伝達者として自らを仲介者として位置づけ、求婚の話に積極的に関わっていく姿勢を示していると言いうことが出来るのではないかと考える。

更に求婚の段階が進み、遠度は求婚に積極的な態度で臨む中で、道綱母のいる広幡中川の邸を訪問することとなる。この場面は従来の先行研究の中でも風流貴公子的な遠度の容姿の描写や物語的要素などが指摘されている。初めての来訪では突然のことに驚いた道綱母は居留守をして道綱に取り次がせるが、二度目は御簾越しでの対面を果たすこととなる。仲介者としての道綱母の立場からこの場面で注目すべき点は二点ある。一点目は、この場面で直接的な対面を果たしたことが以後の道綱母と遠度との関係性に大きく影響してくる点である。これまでは文による交渉であったが、この対面以降は遠度が道綱母を通して兼家に取り入ろうとする姿勢が見られることから、道綱母の仲介者としての機能がこの対面を契機としてより重要な役割となってくるのである。二点目は、二度目の来訪時に遠度が帰ろうとした際に、兼家の意向の件に再度言及するという点である。「殿に、かうなむ仰せられしと、御氣

色給はりて、またのたまはせむこと聞こえさせに、明日明後日のほどにもさぶらふべし」(三三三頁)とあるように、道綱母を介さない兼家との交渉の存在を仄めかしている。これは次に引用する場面での道綱母と遠度とのやり取りと併せて検討していくこととする。

さて、先の二度の来訪によって道綱母との対面を果たした遠度は、その後しばしば道綱母の邸に来訪して、結婚の許可を懇願する。次に引用するのは、遠度が道綱母に対して繰り返し兼家の許可の存在を強調する場面である。

来そめぬれば、しばしばものしつ、おなじことをものすれど、「⑧ここには御許されあらむところより、さもあらむ時こそは、わびてもあべかめれ」と言へば、「⑨やんごとなき許されはなりにたるを」とて、かしこましく責む。「⑩この月こそは殿にも仰せはありしか。二十余日のほどなむ、よき日はある」とて責めらるれど、(下略) (三三三頁)

傍線部⑧では道綱母が兼家からの許可があったならば、辛くてもそれに応じる旨を表明する。つまり、道綱母の中では兼家からの許可は下りていないという認識にあることになる。ここで、「殿に、かうなむ仰せられしと、御気色給はりて、またのたまはせむこと聞こえさせに、明日明後日のほどにもさぶらふべし」(三三三頁)という二度目の来訪時の去り際に遠度が残した言説を考えあわせていきたい。遠度としては自らが兼家と交渉を持つ者であること

を宣言したものと解せる。しかし、道綱母はそれに全く動じることなく、傍線部⑧においても道綱母自身があくまで兼家から直接正式な許可を受け取る人物であるとして自らを規定しようとする意識が見られる。

また、傍線部⑨⑩は共に遠度が兼家から許可が下りたことを強調していることを記している。加えて、直後に「かれより「かくなむ「仰せありき」とて責むると聞こえよ」とのみあれば」(三三三頁)とある。これだけ近接して遠度の同じような言説が示されていることは注目すべきことであろう。なぜこのように幾度も繰り返し遠度の言説が描出されるのか。遠度のこの執拗さは、兼家の「仰せ」に対する両者の認識の違いと、遠度の道綱母に対する依存度の高さに起因するものと思われる。この執拗な遠度の態度は、以下に引用する道綱母と兼家との交渉を導き出すための前提として示されているのである。

さて、なほここにはいといちはやきこちすれば、思ひかくることもなきを、かれより「かくなむ、「仰せありき」とて責むると聞こえよ」とのみあれば、「いかでさはのたまはするにかあらむ。いとかしこましなければ、見せたてまつりつべくて。御返り」と言ひたれば、「さは思ひしかども、助のいそぎしつるほどにて、いとはるかなむなりにけるを、もし御心かはらずは、八月ばかりにものしたまへかし」とあれば、⑪いとめやすきこちして、「かくなむはべめる。いちはやかりける暦は不定なりとは、さればこそ聞こえさせしか」とものした

れば、返りごともなく、(下略)

(三三三三三四頁)

ここに示されたように、遠度の執拗な要求に堪えかねた道綱母が兼家にそれを告げると、兼家から結婚を八月に延期する旨が語られるのである。遠度の言説が直接的な要因となつてこの八月延期の宣言が出されるが、それに対する道綱母の反応が傍線部①に示される。「いとめやすきこちして」とあり、兼家の宣言によつて自身の仲介者としての立場や主張が後押しされたことに安堵したかのごとき道綱母の心情が示されている。この場面においては、道綱母は仲介者として、文を介してではあるが直接的に兼家とのやり取りをすることとなる。これは重要なこととして考えたい。兼家の意向を受け取る仲介者という機能を利用して遠度を巧みに遠ざけながら、兼家と関わる道筋を模索していると見ることができるのではないだろうか。これまで道綱母は一貫して、仲介者としての道綱母自身が見聞きした兼家の言説のみを頼りとして遠度の要求に対応してきた。一方で遠度は自身の主張を曲げようとせず、兼家の「仰せ」があつたとして執拗に道綱母に迫つていたのであつた。兼家の言説の中に「さは思ひしかども」とあることから、遠度の主張もまったく根拠のないものだったとは言えないが、八月延期の宣言は道綱母を仲介者とする求婚記事での情報伝達の構図をより強固に裏打ちするとともに、道綱母が仲介者として兼家と関係していく道筋を切り拓いたとも言えるだろう。

さて、兼家による八月延期の宣言が出されたことによつて、これまで執拗に迫つていた遠度は明らかに意気消沈してしまい、代

わつて道綱母がこれまで以上に活発に仲介者として機能しはじめる。遠度が「ちぎりおきし四月はいかにほととぎすわがみのうきにかけはなれつつ」(三三四頁)の歌を詠むと、道綱母は「やがて追ひて」歌を返す。これまでにないほど早急な反応を示している。そこで読んだ歌は「なほしのべ花たちばなの枝やなきあふひすぎぬる四月なれども」(三三五頁)である。この贈答歌では、結婚が延期されたことを嘆く遠度に対し「なほしのべ」と今の状況に堪えるように励ます道綱母の様子が示されている。これまで遠度の執拗な要求に対して嫌悪感を示していた道綱母が、このように遠度を励ますのは、通常の展開で考えれば違和感がある。これを和歌的儀礼として見なすこともできるであろうが、これまで見てきた仲介者という機能に則して考えれば、より理解しやすくなるのではないだろうか。すなわち、道綱母は兼家の八月延期の宣言によつて、仲介者として兼家と関わっていく道筋をどうにか掴んだわけであつたが、この延期を契機として遠度が求婚を辞退するような事になれば、たちまち仲介者という機能も果たせなくなり、兼家との関係も閉ざされてしまう。よつて、兼家との直接的な交渉を継続するためにも、より長くこの求婚の話を続けさせる必要があつたのである。そのため、ここで道綱母はこれまで嫌悪感をも示していた遠度の執拗な態度に対して、求婚を諦めないように励ますかような和歌を贈つていふと考えることができるのではないだろうか。

これ以降の展開の中では、遠度はひたすら道綱母の「御かへりみ」(三三五頁)を求める。もはや仲介者である道綱母にすぎり、

道綱母の配慮によって結婚を承諾してもらえように頼むのである。その遠度に対して道綱母は「いとわびしく見えたり」(三三五頁)、「いとつかしき」(三三六頁)、「いとほしく」(三三七頁)などの表現に見られるように同情的な思いを寄せている。このように道綱母と遠度との関係性の变化に応じた心境の変化は、以降で確認できる道綱母と遠度との関係性の親密さを疑うような兼家の眼差しを生み出していくこととなる。

道綱母が仲介者として機能するようになったことで、文を介してではあるが兼家との直接的な交渉を持つことができた。このような場面は以降の展開の中にも見られる。以下に引用するのは、兼家の八月延期宣言以降にすっかり立場が変わってしまった道綱母と遠度とのやり取りを冷やかすような兼家の態度と、それに対抗する道綱母の姿である。

かくてなほおなじこと絶えず、殿にもよほしきこえよなど、つねにあれば、返りことも見せむとて、「かくのみあるを、ここには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「程はさものしてしを、などかかくはあらむ。八月待つほどは、そこにびびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひて、⑩「ここにはもよほしきこゆるにはあらず。いとうるさくはべれば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものしはべるを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにはべるかな。

いまさらにいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を

あなまばゆ」とものしけり。

(三四〇～三四一頁)

傍線部⑩の直前には、兼家の言動は「たはぶれ」だろうと思つていたものの、繰り返し言われたことで見過ごせなくなったという道綱母の心境が示される。道綱母にとつては、仲介者という立場を利用して兼家との関係を模索しようとはしていても、遠度のことはあくまで突き放そうとしていた。傍線部⑩の言葉には、あくまで仲介者に過ぎないという道綱母自身の立場を表明した上で、遠度が道綱母の許可を頼みとすることは妥当ではないという道綱母の認識が表明されている。さらに、「いまさらにいかなる駒かなつくべきすさめぬ草にのがれにし身を」の歌が挿入されることで、仲介者としての道綱母の遠度を遠ざけようという姿勢を示そうとしたと考える。

この後、「頭の君、なほこの月のうちには頼みをかけて、責む」(三四一頁)とあるように、遠度は当初、自身が結婚しようとしていた四月を頼みとして集中的に道綱母に許可を迫る。しかし、「月はてぬれば、はるかになりはてぬるに、思ひ憂じぬるにやあらむ、おとなうて月たちぬ」(三四二頁)とあるように五月になると遠度からの音沙汰が途絶えてしまったことが記される。そして注目すべきことは、四月から五月への月替わりに伴う遠度の態度の変化の直後には、次に引用する神社に奉納する和歌の記事が配置されていることである。これは従来も兼家に対する思いを表明した歌

として重視されてきたが、本稿でこれまで検討を行ってきた仲介者としての機能と考え併せるとどのようになるだろうか。まずはその場面を以下に引用する。

今日、かかる雨にも障らで、おなじところなる人、ものへ詣でつ。障ることもなきにと思ひて出でたれば、ある者、「女神には、衣縫ひて奉るこそよかなれ。さしたまへ」と寄りきてささめけば、「いでこころみむかし」とて、縑の雛衣、三つ縫ひたり。したがひどもに、かうぞ書きたりけるは、^⑬いかなる心ばへにかありけむ、神ぞ知るらむかし。

しろたへの衣は神にゆづりてむへだてぬ仲にかへしなすべく

また、

唐衣なれにしつまをうちかへしわがしたがひになすよしもがな

また、

夏衣たつやとぞみるちはやぶる神をひとへに頼む身なれば

暮るれば帰りぬ。

(三四二―三四三頁)

ここでは三首の歌が詠まれる。傍線部^⑬ではこの三首を読んだ心境はどのようなものか、神だけが知っているだろうとして、その内実を明示することはない。しかし、以下の三首の和歌から夫婦の関係を取り戻したいという願望があることが分かる。一首目の

「へだてぬ仲にかへしなすべく」や二首目の「唐衣なれにしつまをうちかへし」などでは、繰り返し夫婦関係を取り戻したいという願望が歌に反映されている。それは、仲介者という立場を利用して道綱母が模索していたことではなかったか。しかし、四月から五月へと月が替わったことによって速度の訪れが途絶え、そのことによって仲介者という立場が継続しがたくなり、結果として兼家との関係性を模索する道筋も途絶えてしまうこととなる。その危機感が、この一連の流れの中で三首の歌を用いた記事を挿入せしめたと考えすることはできないだろうか。

以上、煩雑にはなったが、養女求婚記事の中において仲介者としての機能がさかんに記される場面を辿りながら、道綱母がどのように求婚の話に介入していったかというものを分析してきた。結果として、道綱母は仲介者という機能を利用して二つのことを同時に成し遂げようとしていたのではないかと考える。一つは、速度に対して、あくまで仲介者として接することによって兼家の意向を取り次ぐ人物は道綱母自身であることを主張し、速度の思い通りに求婚を進めるのではなく、あくまで道綱母が仲介者となる形で求婚の話が進められてゆくことを企図していたということである。そしてもう一つは、これまで関係が断絶していた兼家に対して、関係性を取り戻す契機として仲介者という機能を巧みに駆使しようとしていたということである。仲介者であれば、兼家の意向を尋ねるために、文を介してではあっても直接的な交渉を持つことができるのである。その交渉の中で道綱母は兼家との関係を築いていこうとしていたのではないかと考える。仲介者とい

う機能を存分に生かしながらそのような関係性の構築を模索出来るのは、「求婚」という事象ならではの特徴であり、道綱母は仲介者としての立場や役割を大いに利用しながら、兼家との関係をよくに構築していくか模索していたと思われるのである。

四、仲介者という機能の結末

これまでの展開では、道綱母は仲介者という機能を通して、能動的とも言えるような姿勢で兼家との関係を模索してきたと考えた。この求婚記事は、約束の八月が近づいてくる中で、最終的に遠度が他人の妻を盗んだことが露見して呆気なく幕を閉じる。その結末に至るまでの間、仲介者という立場は道綱母にとって、これまでのように兼家と直接的に繋がるために機能しているとは言い難い。むしろ、道綱母は実際の結婚の期日が近づいてくる中で、これまで積極的に利用してきた仲介者という立場そのものに翻弄されるようになるのである。以下では具体的な場面を辿りながら、求婚記事における道綱母にとって、仲介者という機能が最終的にどのようなものとなったのかというを見ていく。

さて、遠度は道綱母に対して兼家への取り次ぎを執拗に懇願するが、道綱母は取り次ぎが困難であることを遠度に繰り返し伝える。以下に引用する道綱母の弁解の言葉に注目すると、道綱母が仲介者という立場に翻弄されている様が確認できる。

さて、⑭かのびびしうもてなすとありしことを思ひて、「いとまめやかには、心ひとつにもはべらず、そそのかしはべらむ

ことは、かたきこちなむする」とものすれば、「いかなることにかはべらむ。いかでこれをだにうけたまはらむ」とて、⑮あまたたび責めらるれば、げにも知らせむ、ことばにては言ひにくきをと思ひて、「御覽ぜさするにも、便なきこちすれど、ただ、これもよほしきこえむことの苦しきを見たまへとてなむ」とて、かたはなべきところは破り取りて出でたれば、簀子にすべり出でて、おぼろなる月にあてて、久しう見て入りぬ。

(三四六―三四七頁)

傍線部⑭は、以前に兼家が「びびしうもてなす」と道綱母の態度を冷やかしたことを思い、遠度の意向を兼家に取り次いで、結婚の許可をもらうことが困難であることを伝えていく。続く傍線部⑮では、仲介が困難であると伝えたにも関わらず、執拗に食い下がる遠度に対し息苦しさを感じた道綱母が、仲介をすることの心苦しさを思い知らせたいという思いを示している。この場面は遠度に「いまさらに」の歌を見せるといふ展開を招くこととなり、その展開の在り方自体も、道綱母が遠度と兼家との間で仲介をした結果が招いたものである。しかしここではその点についての検討は控え、道綱母が仲介者という機能に対する苦悶を表明していることに注目したい。五月になったことで一時は途絶えた遠度の訪れは、再度この場面において執拗さをともなうて描かれる。遠度には想定していた以上に仲介を求められ、一方で兼家には仲介者としての遠度への応対を冷やかされるという事態を引き起こしている。これは道綱母が当初抱いていた目論見に反してしまい、そ

の意味で道綱母が仲介者という機能自体に翻弄されていると言えるだろう。

次に、「いまさら」の歌を見た翌日に遠度から送られてきた文に対し、道綱母が送った文の中の一節に注目したい。「をりをりにはいかでと思ひたまふるを、ついでなき身になりはべりてこそ」(三四九頁)とある。自分からはじめて仲介者の立場ゆえに、むやみに止めるわけにもいかず、遠度に対しては機会があれば取り次いであげたいという姿勢を取る。しかし兼家にとって自身はもはや「ついでなき身」なのだとし、それを理由に取り次ぎが困難であると弁解する。傍線部⑭⑮の内容と比較すると、仲介が困難であるとする理由の内実に相違が見られる。⑭⑮が兼家の冷やかしてあったのに対し、ここでは兼家と自身との関係性の希薄さを理由としている。この両者の場面の間に、その内実の相違に直接繋がるような、兼家との関係に言及する話は挿入されていない。つまり、道綱母は遠度の執拗な要求をどうにか遠ざけるために、兼家に関する様々な情報を駆使しているのである。以上確認してきた二つの場面においては、道綱母は仲介することによって兼家と直接的に繋がろうという姿勢は見られず、むしろ仲介という立場を止めるタイミングを掴めずにその立場に翻弄されている様子が示されているとも言えるだろう。これは、実際の結婚の期日が近づいてくる中で、仲介者という機能によって兼家との繋がりを持とうなどという余裕が徐々になくなってきたことを示している。そのことがより顕著に表れている記述が次に引用する場面において見られる。

七月になり約束の期日が迫ってくる中で、求婚の話がまさに破綻する直前での道綱母の心情が示されていることに注目したい。

七月になりぬ。⑯八月近きこちするに、見る人はなほいとうら若く、いかならむと思ふことしげきに紛れて、わが思ふことは、いまは絶えはてにたり。七月中の十日ばかりになりぬ。頭の君、いとあざるれば、われを頼みたるかなと思ふほどに、ある人の言ふやう、「右馬頭の君は、人の妻をぬすみとりてなむ、あるところにかくれるたまへる。いみじうをこなることになむ、世にも言ひ騒ぐなる」と聞きつれば、(略)

(三五〇～三五一頁)

傍線部⑯では、八月が近くなるが、養女は相変わらず幼い様子である。この養女の幼さについては一連の記事の当初から幾度も触れられ、それを理由に結婚が許可出来ないとしてきた。八月が近くなっても、結婚させる気がないことはこの記述からも分かる。一方で約束の期日が徐々に迫ってくる中で、実際にどうなってしまうのかという物思いが多いことに紛れて、兼家との関係における苦悩や物思いが今は「絶えはて」たとする。つまり、実際の求婚の話がどうしても気がかりで兼家とのことを考えている余裕がなくなってきたのである。さらに、七月も半ばごろになった頃、八月が近づいているので「頭の君、いとあざるれば、われを頼みたるかな」(三五〇頁)と、遠度が道綱母を仲介者として頼りにしていることを気にかけるさまが示される。しかし、仲介者という

機能に対する積極性を示すことはなく、やや惰性的な態度でいるとも言えるだろう。

このように、仲介者という立場に限界を感じていた道綱母にとっては、遠度の失態の露見による求婚の話の破綻は、むしろ好都合だったとも言える。これまでは、自分で始めた仲介者という立場をむやみに止めるわけにもいかず、もはや限界で身動きがとれない状況になっていた。その流れの中で遠度の失態が露見し、それを聞いた道綱母の心情が「われは、かぎりなくめやすいことをも聞くかな、月の過ぐるに、いかに言ひやらむと思ひつるに、と思ふものから、あやしの心やとは思ひけむかし」(三五一頁)と示される。「かぎりなくめやすいこと」とあるように、遠度の失態の露見によって求婚の話が無くなるだろうと安堵している。これは、求婚の話が無くなること自体に対してのみならず、すでに限界を感じていた仲介者という立場を継続する必要が無くなったことに対する安堵でもあるだろう。また一方で、求婚の話が破綻することには安堵を感じていることは、この求婚記事の最終段階においては、もはや道綱母が兼家と仲介者という立場を介して繋がりを保持とうとはしていなかったことを示すことにもなる。続く表現に着目すると、「月の過ぐるに、いかに言ひやらむと思ひつるに、と思ふものから」(三五一頁)とあるように、約束の八月が迫ってきていたことが道綱母に現実的な切迫感をもたらしていたことが示されている。

以上確認してきたように、求婚記事の最終段階である遠度の失態の露見に際しては、道綱母が示した心情表現の中においても、

もはや仲介者という立場に限界を感じていたことが如実に現れていた。

五、おわりに

下巻の養女求婚記事に関する従来の研究は、道綱母と遠度の二者の關係に注目し、それをあたかも男女の交渉のような妖艶なものとして捉えることで道綱母の思いを探る方向性が中心であった。一方で兼家と道綱母との關係が遠度という第三者を介在させた間接的な關係であったとする指摘も見られる。これらの論は、主にな上巻から続く主題との関連を読み取ろうとするもので、關係性の内実を明らかにすることで道綱母の心情に結びつけるものであった。本稿は、特に後者の論に対して、道綱母と兼家と遠度という三者の關係性の構図を、遠度を媒介としたものではなく、むしろ道綱母が兼家と遠度とを繋ぐ仲介者として機能する構図として捉えて論じたものである。

結果として、道綱母は仲介者という機能によって兼家と、間接的というよりもむしろ直接的とも言える繋がりを持ち、ある意味では積極的に關係を築こうとしていたのではないかと考えた。そして養女の結婚という現実がしだいに迫ってくる中で、兼家との繋がりを保持しようという余裕がなくなり、限界を感じていたところに遠度の失態が露見する。このことで求婚の話は破綻となり、仲介者という機能も終結を迎えるのであった。

今後の課題としては、養女求婚記事を下巻の中で、或いは下巻末尾に至る流れの中でどのように位置づけていくことが出来るの

かという点が挙げられる。この後の展開では、藤原兼通との和歌の贈答で今回登場した「いまさらに」の和歌の流出の問題があり、また道綱が抱瘡になった場面や賀茂の臨時の祭りなどでも兼家に対する思いが綴られるなど、求婚の話に紛れて絶え果てたという兼家への物思いが形を変えて末尾近くに至るまで度々登場する。このように、求婚の話が後の展開の中でも尾をひいていると思われる部分が多くある。養女求婚記事の内実も含め、道綱母の心情については更に考えていく必要があるだろう。上巻や中巻との繋がりに縛られずに下巻そのものの在り方も尊重しながら、引き続き本文に忠実に考察を進めていくことしたい。

注

- (1) 倉田実『蜻蛉日記の養女迎え』（新典社、二〇〇六年九月）は、遠度の求婚の作法などの面から、養女求婚記事を再度捉え直そうとしたものである。
- (2) 庄司敏子『『蜻蛉日記』下巻「養女求婚記事」における手紙——破り取られた「いまさらに」詠を中心に——』（『古代中世文学論考第二九集』、新典社、二〇一四年三月）
- (3) 主要な論を以下に示す。道綱母と遠度との関係に対して男女の交渉という読み筋を早くに指摘したのは石坂妙子『世の中』の変容②——遠度求婚譚』（『平安期日記文芸の研究』、新典社、一九九七年一〇月。初出は一九八一年五月）である。石坂氏は、両者の関係が「単なる養女への求婚者と養女

の保護者の立場を超えた微妙な雰囲気」を帯びているとし、「遠度求婚譚の形成は、道綱母にとって自らの女としての華やきと幸福な「世の中」への夢想とを取り留めようとする営みだった」と述べている。これに続いて和歌の表現面での分析から両者の関係を「あらまほしい男女の場」としたのは、川村裕子「遠度求婚譚をめぐる」（『蜻蛉日記の表現と和歌』、笠間書院、一九九八年五月。初出は一九八四年七月）である。川村氏は、「遠度と自分との世界を、あり得べき情趣の場として表象し、そこに道綱母の探し求めた男・女の場を色濃く投影させた」とし、その表現の中に兼家との関係の「代償を隠していた」とする。以上二つの論では、下巻の養女求婚記事での遠度の描写や交わされる和歌の表現から、兼家との間に失われてしまった男女の関係を遠度との関係の中に見出そうとしていたことを指摘している。また、男女の交渉の読み筋を用いて主題の内実に迫った論として、守屋省吾「蜻蛉日記下巻考——遠度求婚の経緯をめぐる——」（『論集日記文学 日記文学の方法と展開』、笠間書院、一九九一年四月）がある。守屋氏は、先に挙げた男女の交渉という見方も認めつつ、「決定的断絶ともいえるべき兼家との関係の代償として、あわれにも遠度との交渉を艶なるものとしてゆこうとする同情すべき道綱母を、そしてまた直接的な関係が絶ち切られてもなお間接的にも兼家との絆を保持することを願望するみじめなまでに悲しい道綱母を、二重に作者は描き出さんとしている」とし、そのことで上巻か

ら続く主題がより一層内在化していくとする。この守屋氏の論を踏まえつつ、作者としての道綱母が描き出そうとしていたのは、兼家の〈形代〉としてではなく、「より形而上的レベルにおける『身の上』だった」とする、金子富佐子『蜻蛉日記』下巻試論——『速度求婚』の記事の方法——（『日記文学研究第一集』、新典社、一九九三年五月）もある。金子氏は物語的展開のあつけない破綻から、養女求婚記事を道綱母の「〈反古物語的意識〉の暗喩」として捉える読み筋も併せて提示している。

(4) 守屋省吾氏（前掲注（3）参照）は、道綱母が兼家の指示に固執する道綱母を描くことは、「一妻妾として直に兼家に繋がる道が完全に閉されたにもかかわらず、なおしかし間接的であれ兼家に繋がりうとし、兼家に執する女の姿を表出する作者の方法」であつたとしている。この論は、道綱母と兼家との関係が第三者を媒介としたあくまで「間接的」なものであると捉えている。この論に同調する形で論じられ、本稿で特に重視したい指摘が、大内英範『蜻蛉日記下巻の一考察——遠度の養女求婚記事をめぐって——』（『日本文学論究』第五二号、一九九三年三月）である。大内氏は、養女求婚記事において道綱母がからうじて維持した兼家との繋がりが、養女を媒介とすることを踏まえれば直接的な交渉ではないことを指摘する中で、「誰かを介在させることで間接的に兼家を求める新しい関係」が描かれていると論じている。以上の論では「間接的」ということが盛ん指摘され

るが、本稿ではむしろ道綱母が仲介者となることによって、文を介してではあるが兼家とある種直接的に繋がっていくということを重視していきたい。

(5) 川村裕子『蜻蛉日記』下巻「速度求婚譚」の文を読む（『王朝女流文学の新展望』、竹林舎、二〇〇三年五月）では、川村氏が「確かに、求婚譚は、道綱母と遠度の麗しい場面ばかりが目につく。しかし、その底には常に兼家の許可や伝言にすぎりつくような様相が、複雑な型で描かれていると言えるのではないか」と指摘する。これは、男女の交渉のとき関係であるという読み筋を支持しつつも、この記事の主眼があくまで兼家にあることを改めて強調している。やはり道綱母と兼家と遠度という三者を論の俎上にのせてゆくことが重要であると考えてよいであろう。以上の論も参照しつつ、本稿では三者の関係を道綱母を仲介者として成立するものとして捉え、論じていくこととする。

(6) 「仲介者」の語は従来、道綱に対して用いられることが多かった。たとえば、川村裕子『蜻蛉日記の鳴滝籠りについて』（『新潟産業大学人文学部紀要』第二号、一九九五年九月）では、中巻・天禄二年の鳴滝参籠の記事の中で、寺に籠る道綱母と麓まで迎えに來た兼家との間を行き來する道綱に対して「仲介者」の語を以て論じている。また、倉田実「求婚相手宅での居初め」（『王朝の恋と別れ——言葉と物の情愛表現』、森話社、二〇一四年一月。初出は二〇〇七年三月）は、養女求婚記事における道綱を「仲介者」として論

じている。しかし、本稿では道綱母を養女求婚記事の中で兼家と遠度との間を取り持つ仲介者として見る事が出来るものと考ええる。仲介者という視点は、これまで道綱について用いられる場合には、単なる人と人との繋ぐ役割・立場としてあった。しかし、求婚記事において道綱母を仲介者として見てみると、その機能を利用した何らかの意図を読み取ることも可能である。その意味で、求婚記事での仲介者を焦点化することは、道綱母の兼家への思いを探る上で有効な方法であると考ええる。

(7) 本文の引用は、菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳、新編日本古典文学全集13『土佐日記 蜻蛉日記』（小学館、一九九五年一〇月）に拠り、括弧内に頁数を示した。なお傍線はすべて筆者、以下同じ。

(8) 川村裕子氏は、遠度が兼家と道綱母との間に直接的な事務上の交渉がない事を利用して、自身が兼家の意向を受け取ったとする指摘している。これについては、川村裕子「遠度求婚譚をめぐって」（前掲注（3）参照）に詳しい。

(9) 「わが思ふことは、いまは絶えはてにたり」の「わが思ふこと」とは一体何を指すのかという点には疑問が残る。本稿では諸注の解釈にならない「兼家との関係における苦悩や物思い」としたが、「絶えはてた」を含めて考えると、この後の展開で兼家への思いが全く見られなくなるといふわけではないため、やや納得しがたく思われる。道綱母が「絶えはてた」とする物思いの内実も含めて、この後の展開の中でどのよ

付記

うに変化していくかは今後考えてゆくこととしたい。

本論は、東北大学国文学会平成二十六年年度研究発表大会（二〇一四年十一月一五日、於東北大学文学部第二講義室）での口頭発表に基づいたものである。会場でご指導を賜った方々と、貴重な発表の機会を下さった諸先生方、先輩方に深く感謝申し上げます。

（東北大学大学院文学研究科前期課程在籍）